フリガナ	ニシハラヤスユキ
氏名	西原　康行
学位	博　士（教育学）
学位記番号	新大院博（教）第４号
学位授与の日付	平成２０年３月２４日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
博士論文名	**スポーツ指導者の状況認知に関する実践的研究**
論文審査委員	主　査　生田孝至
	副　査　大浦容子
	副　査　永山庸男

博士論文の要旨

スポーツでの指導は従来経験と勘に頼るところが多く、指導者の意思決定と行為は暗黙的でその力量については科学的な研究の必要性が指摘されてきている。熟達したスポーツ指導者の技能領域は熟達研究では創造的技能領域といわれ、技能の熟達において重要な領域とされている。本研究は、スポーツ指導者の状況認知を対象化し、実践的実証的な研究によりスポーツ指導における熟達した技能に関わる特徴を明らかにした。

論文は5章構成で、第1章では身体の熟達と認知について先行研究を概観し、身体を取り巻く様々な熟達は、熟達の初期段階では表層的で明示的な構造に基づくが、熟達するにしたがい深層の表象構造を形成していくことを明らかにした。さらに、研究方法論とて状況認知だけにとどまらず、状況認知と身体感覚の双方をとらえることがスポーツ指導者の力量をとらえるために必要であるとの課題を明らかにした。

第２章ではスポーツ指導者に関する先行研究を概観し、スポーツ指導者研究では、従来のALT-PE観察法を超えた個々のスポーツ指導者の「今ここ」での教授力量をとらえることが求められており、特に熟達した指導者の特徴である先読みという力量を裏付ける状況認知を対象化する必要性について述べている。この第１章と第２章で浮き彫りになった課

題をうけて、3章から5章においてその解明に向けての実証的実践的研究で構成されている。

第３章では、熟達したスポーツ指導者が学習者の技能をどう認知するかを、スキーの技能を対象に実証的な研究を行った。スキー技能はそれが深層的表象での判断を必要とするところから、初心の指導者と熟達した指導者を対象に学習者の技能識別調査を行った。その結果、熟達した指導者は初心の指導者に比して学習者の技能を見極める能力が高く、その力量の差は指導者自らの身体の感覚と学習者の動きのズレによる判断の差であることを明らかにした。これにより、指導者の状況認知にはその身体感覚が深く関わっており、それはスポーツ指導上重要な要因であることが明らかとなった。

第４章は、スポーツ指導者のゲーム（試合）時の状況認知、とりわけ試合の先読みに関する認知を対象とする研究である。 研究方法は、ゲーム時にける指導者の視覚を収録し、その映像の再現認知に基づくプロトコル分析により、授業時における先読みを裏付ける状況認知の特徴を検討している。とりわけゲーム時の状況認知は、全体空間の認知と学習者個々への個別認知とが動的になされており、全体と部分の認知が創造的に機能していることが明らかとなった。

第５章は、第４章での空間認知や先読み認知をプロの指導者である、Jリーグユースチームのコーチであるプロフェッショナルなレベルのサッカーの指導者を対象として、サッカーＪリーグの試合時にピッチ脇でのベンチでの状況認知を調べその特徴を検討している。その結果、熟達したサッカー指導者は試合時に３つの段階で空間認知や先読みの状況認知をしていることが明らかとなった。第１段階は、ピッチ全体のアスリートのポジションを客観的に鳥瞰として状況認知する段階、第２段階は、ピッチの部分的なアスリートの動きを客観的に鳥瞰として状況認知して空間のスペースを確定する段階、そして第３段階は、スポーツ指導者自らがピッチ上のアスリートの感覚で主観的に身体の感覚とのズレで状況認知し、試合での展開の特徴を予測する段階、である。これら三段階での状況認知は、試合開始数分内でなされており、その後はこれらをベースにそれぞれの認知を状況に応じて修正することが把握された。

以上から、熟達したスポーツ指導者は、広い空間の認知や自らの身体感覚とアスリートや学習者の動きのズレに依って先読みの状況認知し、それが指導につながっていくとの結論を得た。また、それぞれのスポーツ指導者が熟達者に至るまでには指導者自身の様々な社会的文化的要因が関与しておりそれが状況認知に大きく影響するなど指導者論にも言及し、最後に今後の課題と展望が示されている。

審査結果の要旨

本論文の意義は、スポーツ指導者の熟達した状況認知には、客観的で分析的な視野と、その過程においては自らの身体感覚による状況認知と、さらなる修正が相互作用的に動員され、高度な熟達者の技術過程を形成していることが明らかにされたことにある。従来この分野では、経験的事例的な研究が多く、指導方法も指導者の属人的要因が強いため、指導方法の伝承的機能に弱点があった。本研究によるスポーツ指導者のこうした状況認知の把握により、スポーツ指導者の成長とその指導方法との関係が明らかになり、スポーツ指導者の創造的技能領域研究に新たな知見を加えることが出来たことは高く評価できる。とりわけプロサッカーコーチの状況認知が、まずピッチ全体のアスリートのポジションを客観的に鳥瞰として状況認知し、次に個々のアスリートの動きを客観的に鳥瞰として状況認知して空間のスペースを確定し、そしてコーチ自らがピッチ上のアスリートの感覚で身体的感覚により状況認知し試合展開の特徴を予測する、というダイナミックな認知過程が明らかになったことは、技術の創造的領域での指導者の育成にとって極めて有意義であり、熟達研究に大きく寄与する成果といえる。この一連の研究は、国内の学会および国際学会において発表し評価されている。また、指導者の視覚を記録するCCDカメラを組み込んだ方法とプロトコル分析、イメージ画のスケッチなどは、本研究の固有な手法であり、今後の状況認知の研究方法に寄与できる優れた業績である。これらの成果は、今後の実践的研究に応用できるところから、多くのスポーツ指導者の実践的指導場面において活用され豊富な成果が期待できる。以上から本論文は、学位論文として十分な内容を備えているといえる。

以上の審査の結果、本審査委員会は、本論文が指導者の熟達と指導力に関わる内容であることから、博士（教育学）の学位を付与するにふさわしいとの結論に一致した。